

特集「循環器疾患：最近の話題」

巻 頭 言

京都市立医科大学大学院医学研究科
細胞分子機能病理学

高 松 哲 郎

新しい技術革新が起きると、それまでの概念や価値観が革命的に変わってしまう、いわゆるパラダイムシフトが起きることはよく経験されることである。循環器学においては、たとえば超音波エコーから始まった画像診断や心室リモデリングの概念であり、心疾患に対する診断能力や考えを革命的に変えてくれた。前回、2006年に「循環器研究の最前線」として研究センターの特集を組ませてもらったが、この数年間にも循環器学の著しい進歩があった。今回は循環器内科学、心臓血管外科学、小児科学、病理学など幅広い分野の研究者に依頼したところ次の話題が集まった。松原弘明氏には「循環器疾患：最近の話題」と題して循環器内科学教室が中心となって進めている、診療における技術革新を総括的に、夜久均氏には「虚血性心筋症に対して左室形成術は有効か？—STICH trialをめぐる諸問題—」と題して虚血性心筋症に対して左室形成術の有効性について、白石公氏には「成人期を迎えた先天性心疾患患者の諸問題」と題して既に20歳以上の成人が小児期より数で上回っている先天性心疾患患者の諸問題につい

て、糸井利幸氏には「最新の肺高血圧治療」と題して取り扱いに苦慮する肺高血圧症の考え方と治療法について、田中秀央氏には「何故心房拍動は起きるのか」と題して不整脈、なかでも心房細動の最近の話題について概説していただいた。

この特集で扱われている話題をみると、現在循環器疾患を扱っている臨床医や研究者が今戦っている、ないしは戦わなければならない相手が見えてくる。それは重症心不全であり、難治性不整脈であり、肺循環である。これらは多くの場合、心疾患の続発症であることが特徴である。白石公氏がその稿のなかで「小児期に順調に経過した先天性心疾患患者も、成人期に入り年齢を重ねるにつれ、遺残病変や続発症のために新たな様々な問題を引き起こす。」と述べているように、近年の技術革新によって、多くの原疾患を治療することができたり、急性期を脱することができたりするようになったが、それで終りでないことが浮かび上がってくる。これまで以上の長期予後を考えなければならない時代になったと思う。